

## 論文の内容の要旨

論文題目： 19世紀ドイツにおける古典語教育・古典研究の展開と国民形成  
－ テオドール・モムゼンとフリードリヒ・ニーチェを手がかりに －

氏名：曾田 長人

本論は19世紀ドイツにおける古典語教育・古典研究の展開と国民形成の関わりを振り返り、その分析を通して19世紀ドイツにおける人文主義の継受と国民形成の関わりの特徴や意義を考察した。周知のようにドイツは三十年戦争後、政治的・文化的に様々な意味での分裂状態に置かれ、その内実が一定しなかった。しかし19世紀には古典古代（特に古代ギリシャ）という模範との取り組みを通して、旧来・外来のものからの解放とドイツに自生的なものの形成が図られたのである。

考察に際して筆者は、18世紀後期から19世紀初期にかけての人文主義者の著作を手掛かりに新人文主義的な古典語教育・古典研究によるドイツの国民形成コンセプトの再構成を行い（第1章）、そのコンセプトと19世紀ドイツにおける古典語教育・古典研究の実際の展開との理念上のずれを、引いてはそのずれと国民形成の現実との相関関係を検討した（第2章）。さらに19世紀中期以降のドイツにおいてそれぞれ政治的な国民形成、文化的な国民形成の徹底を試みた古典研究者としてテオドール・モムゼン（Theodor Mommsen）とフリードリヒ・ニーチェ（Friedrich Nietzsche）に注目し、彼らの古典語教育・古典研究（観）とドイツ国民形成の関わりを考察した（第3、第4章）。

上で触れたドイツの国民形成コンセプトとしては、「ドイツ（ヨーロッパ）の有機体論（文化）対イギリス・フランス（オリエント）の機械論（文明）」、精神（Geist）に類する概念の受肉による「個人形成のメディア（古典語、古典研究など）－（文化的・政治的な）ドイツ・ネイション」の三位一体的で有機体的な形成という2つの図式を再構成した。その際、古典語・古典研究という形成のメディアとの取り組みが一方で（事柄の知識の歴史学的な研究に基づいて旧来・外来の規範を相対化し）機械論的な対抗思潮（啓蒙専制国家〔分

邦主義]、汎愛[実科]主義、正統主義的なキリスト教、フランス文化など)からの脱却に貢献し、他方で(古典語の中に孕まれていると考えられた)精神(人間性の理想)の受肉による「個人-形成のメディア(古典語、古典研究) - (文化的・政治的な)ドイツ・ネイション」の三位一体的で有機体的な形成が期待された。つまり古典語・古典研究との取り組みが「ギリシャとドイツの親縁性」に基づいて個人や文化国民としてのドイツの形成に貢献するだけでなく、「形式的陶冶」に基づいて個人の主体化や自由の実現、引いては主体化され自由となった個人がドイツの統一に寄与することが遠望されたのである。しかも新人文主義が対抗思潮(機械論)に対して行った批判の仕方の中には、プロテスタンティズムにおける「信仰の原理の行為の原理に対する優位」の枠組みと同様の特徴が見られ、本来の信仰(Geist 霊・精神)の取戻しを経た上で、信仰の現実化としての行為を肯定し対抗思潮を統合する企図が明らかとなった。すなわち新人文主義的なドイツ国民形成コンセプトにおいては、キリスト教に代わって新たに(古代ギリシャ)文化の中に信仰的な価値が見出され、それへの帰依を経た上で行為としての政治・経済活動を肯定し、この両者がドイツの文化的・政治的な国民形成へ寄与することが目指されていたのである。

しかるに19世紀ドイツにおける現実の古典語教育・古典研究及び国民形成の展開において、こうした理想主義的な国民形成コンセプトの実現は反動体制の結成によって阻まれた。その結果、古典研究においては改めて形成のメディアとしての古代ギリシャの中に有機体性を歴史学的に見出し、それをドイツの国民形成の参考にしようとする試みがなされた。しかしこうした歴史研究が研究対象の広がり招くことを危惧しあくまで個人の主体化を重視する立場も存在し、両者の立場の対立が古典研究におけるヘルマン-ベック論争、古典語教育におけるティールシューシュルツェ論争によって顕在化した。この論争の余波は19世紀後期にまで及び、論争の内容・背景として前者は①「事柄の知識との取り組み、実科主義、政治的な国民形成、行為の原理、リベラリズム、プロイセン」に近い立場、後者は②「言語の知識との取り組み、キリスト教、文化的な国民形成、信仰の原理、ロマン派、非プロイセン」に近い立場に依拠した。上で挙げた2つの論争は、新人文主義的な古典語教育・古典研究が領邦国家間の対立、(信仰の原理と行為の原理の区別に基づく)宗派对立、実科主義とキリスト教の対立、文化と政治の対立など様々な対立関係を当初目指されたように統合するよりも、むしろ相対立する対抗思潮に近い立場へと分裂し、それによって同時代のドイツの国民形成との関わりを保っている状況を示すものであった。

1849年の3月革命に際しては、精神が現実に対する形成力を持つという新人文主義の立場が理念的・現実的に揺ぎつつある事態が明白となり、しかも①の古典研究自体の内的な展開が同様の帰結を招いていた。しかし古典語教育・古典研究は3月革命後もなお制度的に延命したことから形骸化の意識が強まり、古典語教育、古典研究、教養のコンセプトの自己刷新の企てが現われ、他方で対抗思潮との関係が変化した。これらの企てや変化にも関わらず、古典語教育・古典研究はプロイセンを中心とする諸領邦国家の庇護に入りつつあり、ドイツ・ネイションの新たな「形成」よりもむしろすでに存在するドイツ・ネイションの「維持」に貢献しつつある事態が現れていた。また1871年に第2帝国が成立した後、ドイツは未だに分裂状態にあることが一般に強く意識され、新人文主義的な古典語教育・古典研究によるドイツ国民形成のコンセプトは強い批判に曝された。そこで本論においては、19世紀中期以降こうした危機の打開を試みる古典研究上及び国民形成上の、以下の3

つの企てを検討した。

第1にモムゼンは、上で触れた古典研究の①の流れを汲み、ドイツの政治的な国民形成の完成を志し、文化的な国民形成に対しては批判的であった。彼は市民共同体や形成のメディアとしての学問（歴史学的な古典研究）の形成を重視し、学問との取り組みの中に信仰的な価値を見出し、この信仰に基づいてドイツの政治的な国民形成という行為への寄与や文化的な国民形成の主体である教養市民に対する批判を行った。

第2にニーチェは、上で触れた古典研究の②の流れを汲み、古代ギリシャにおける本来の精神の取り戻しによるドイツの文化的な国民形成の完成を初期には志し、政治的な国民形成に対しては批判的であった。彼は文化的な個人（主体）と形成のメディアとしての芸術（初期）・文化（中期・後期）を重視し、芸術・文化との取り組みの中に信仰的な価値を見出し、この信仰に基づいてドイツの文化的な国民形成という行為への寄与（初期）や政治的な国民形成、形成のメディアとしての学問（初期）に対する批判を行った。

（モムゼンとニーチェはドイツの政治的・文化的な国民形成が古い機械論的な性格を継承したまま有機体論に渾然一体と融合されていた現実、及びその背景にあった「言語によって基礎付けられた精神・世界」というキリスト教的な考えに対する批判を異なる仕方によって行い、新人文主義的な古典語教育・古典研究の発展的な継承を試みたのである。）

第3に大衆ナショナリズムは、新たにドイツ・ゲルマン信仰（ドイツ精神）に依拠し、ドイツ国民宗教への信仰を通して実科主義や後には第2帝国の政治という行為の肯定へ向かった。その際ドイツ・ネイションの中には神格化された高い価値が見出され、それへ個人や形成のメディア（学問、文化など）の従属すべきことが主張された。そして新人文主義が目指したような対抗思潮の統合によるドイツの国民形成という考えは、現実において改めて大衆ナショナリズムによって実現されつつあったのである。

第2次世界大戦後の西ドイツにおいては19世紀以後のドイツの国民形成をめぐって、大衆ナショナリズムから第3帝国の成立へ連なった実際上の展開と、モムゼンとニーチェの古典語教育・古典研究（観）の結合によってあり得たであろう可能的な展開という、ドイツ国民形成の2つの系譜が問題となっていたことが明らかとなった。この2つの系譜においては、プロテスタンティズムにおける「信仰の原理と行為の原理」の区別の刻印を留めた、文化と政治の間のあるべき関係の形成が問題となっていたのである。

こうして19世紀ドイツにおいて新人文主義的な古典語教育・古典研究は、19世紀以前のプロテスタンティズムを中心とした国民形成から20世紀の大衆ナショナリズムを中心とした国民形成への媒介の役割を果たしただけでなく、モムゼンとニーチェの例に見られたように後者を乗り越える方向を孕んでいたと言えよう。さらにプロテスタンティズムの信仰覚醒運動において「霊－文字－行為」の3者の中から専制的な現われに対する批判の試みがなされたのと同様に、新人文主義的な古典語教育・古典研究とドイツ国民形成の関わりにおいては「個人－形成のメディア－ドイツ・ネイション」の3者の中から専制的な現われに対する批判が行われた。したがって、新人文主義的な古典語教育・古典研究は人間中心主義に依拠し神中心のキリスト教（特にプロテスタンティズム）と内容的に対立していたにも関わらず、ドイツ国民形成との関わりにおいては性格的にプロテスタンティズムの影響を深く受けていたと言うことができよう。そしてこれらの特徴は、ドイツ・ヨーロッパの同一性の形成や維持に収斂する傾向が見られたのである。